

若手アカデミーの動向

第1回 若手科学者サミットの開催

竹村仁美



2016年7月10日の午後、若手アカデミー（若手科学者ネットワーク分科会）が第1回若手科学者サミットを日本学術会議において開催した。若手科学者サミットは、若手の会組織間及び研究者個人間の学術交流を目的として開催され、今回のサミットはポスター発表会の形式をとることとした。各学協会の若手の会からポスターを募り、若手の会の紹介を中心に、紙面に余裕のある方については発表者個人の研究も盛り込んだ内容を1枚のポスターにまとめて頂いた。

当日は午後1時より日本学術会議講堂で若手アカデミー（若手による学術の未来検討分科会）主催のシンポジウム「融合を問う：学問の消滅と生成の系譜学から」が開催されており、その途中から同時並行の形で若手科学者サミットを開いた。午後3時20分、宇南山卓若手科学者ネットワーク分科会委員長の開会の挨拶に続いて、自己紹介を兼ね、ポスター発表者全員が若手の会の紹介を含むフラッシュトークを行った。折からの九州地方豪雨で道中、ポスターが湿気を含んでしまったといった小話が会場を沸かせるなど、すべての参加者が他の若手の会の様子を熱心に聞き入った。

フラッシュトークを通じ、参加した多くの若手の会が産学又は産学官連携の形で活動している現状を知り、また、活動頻度、活動経費、幹事の負担、若手研究者の減少といった共通の課題と対応策も見えてきた。若手の定義に関して、多くの若手の会で厳密な年齢の上限を設定せず、「気持ち若ければ若手」、「都市部と比べて地方部は若手研究者が少なく、若手の会の幹事には50代もいる」といった柔軟な対応が見られることがわかった。ポスター発表会では、発表者と参加者との間で質疑応答もできて、より具体的に若手の会の活発な活動内容を知ることができた。顔に関する研究を行う学会の若手の会は、化粧品会社の職員も積極的に参加し、企業と学術の交流の場となっている様子を話してくださいました。ポスター発表の個人研究の内容は高度に専門的であり、いずれのポスターも力作で、参加者からは次回から優れたポスターを表彰してほしいとの声も上がった。若手の会が、



若手研究者と研究者を目指す大学院生相互間の成長・連携作用を促進し、時には産学官の協働・融合の場を提供していることが明らかになったように思う。和気藹々とした雰囲気の中、約1時間の発表時間は瞬く間に流れ、名残惜しくも午後4時半前後に閉会となった。

今回、10の学協会の若手の会からポスター発表の応募があった。日本顔学会若手交流会、日本行動科学学会若手の会、日本教育行政学会若手ネットワーク、日本心理学会若手の会、Japan National Young Water Professional、日本基礎心理学会若手研究者特別委員会、化学工学会九州支部若手エンジニア連絡会、日本家禽学会若手幹事会、血管生物若手研究会、疫学の未来を語る若手の会（受付順）以上の10の若手の会から12件のポスター発表の申込みがあり、当日11件の発表が行われた。

若手科学者サミットの招集に当たっては、若手アカデミーの前身組織である若手アカデミー委員会の構築した若手科学者ネットワーク旧メーリングリストを主として活用した。現在、若手アカデミーとして改めて新メーリングリストを準備中であることから、新メーリングリストへ新規登録申込みをしてくださった方にもサミット開催を通知した。2016年7月中旬現在で、新メーリングリストの登録作業は進行中であり、101の若手の会からメーリングリストへの参加の希望が出され、旧メーリングリストの82団体を上回っている。今後も若手科学者ネットワークの有意義で活発な利用を図りたい。

●プロフィール

竹村仁美（たけむらひとみ）

日本学術会議特任連携会員、一橋大学大学院法学研究科准教授

専門：国際法

若手アカデミー「国際分科会」の活動

—若手研究者の国際的なネットワーキングへ向けて

北村友人



世界的に若手研究者を取り巻く環境は厳しさを増している。学位取得後も安定した研究職に就くことができないポストドクター問題は、多くの国で共通した課題となっている。また、不安定な環境のなかで成果主義がますます激しくなっているにもかかわらず、若手研究者のメンタル・ヘルスに関して十分な注意が向けられているとはいえない。さらには、そうした状況のなかで研究倫理に反する行為へと走る者も出てくる。

若手研究者をめぐる国際的な状況に関して、悲観的な側面を描くことからこの小論を始めてしまったが、21世紀の知識基盤社会のなかで若手研究者たちが活躍できる領域がこれまで以上に広がっていることも一方で事実としてある。とりわけ情報技術の発達に伴い国境を越えた共同研究の機会が増していることは、もともとグローバルな性質をもつ学術という営みの可能性をさらに高めている。

このような現状への問題意識と将来への期待や希望にもとづき、日本学術会議・若手アカデミーの国際分科会では、できるだけ広い視野に立って若手研究者たちのあり方について考えている。今日の世界で日本の学術がどのような役割を果たすべきか。また他国における学術の状況と比較してわが国の学術をどのように進めていくべきか。これらを、今後数十年にわたって日本の学術を牽引すべき若手研究者の立場から考え、また世界各国に次々と設立されている若手アカデミーとの連携を通して実践していくことを目指している。

こうした目的のもと、主に国際ワークショップの開催や国際的な若手学術組織であるグローバル若手アカデミー（GYA）への参画、関連した国際会議への研究者派遣などを通じて、他国の若手アカデミーならびに若手研究者たちとの交流を深めている。筆者自身も、2015年11月にストックホルムで開催された第2回若手アカデミー世界大会に日本学術会議から派遣していただき、若手研究者としての学術的課題や社会的役割について世界各地からの参加者たちと意見交換を行う機会を得た。

国際分科会では、フィリピン、台湾、イスラエル、韓国、インドネシア、マレーシア、インドの若手研究者たちを招聘して、第2回アジア若手科学者会議（2015年3月16日～18日）を東京で開催した（ちなみに、第1回会議も2013年に東京で開催し、アジアにおける若手科学者のネットワークを強化することで合意した）。アジアでは近年、若手アカデミーが続々と設立されており、それらの間で緊密な連絡を取りながら、域内また他地域の若手研究者たちが連携してグローバルな課題に立ち向かっていくことの重要性を確認した。この会議の最後には、「持続可能な環境へ向けて明確なインパクトをもたらすこと－若手科学者たちのレンズを通して主要課題や可能な解決策を考える－」と題した宣言文を採択し、地球規模課題に関する教育の重要性や、それらの課題の予防ならびに解決に資する科学研究の役割の大きさなどを強調した。とくに、グローバルな課題に対してアジアの若手研究者たちが連携して研究面での成果を上げていくだけでなく、それらの課題をより多くの人に理解してもらうためのアウトリーチ活動の充実が不可欠であることについても合意した。

アジア各国は社会経済的に多様な状況にあるため、若手アカデミーのあり方や若手科学者たちを取り巻く環境もさまざまである。しかしながら、若手アカデミーの活動をいかに充実させていくかといった問題や、安定的な財源を確保することの難しさなど、共通した課題も抱えている。また、日本学術会議が議長を務めた2016年のGサイエンス学術会議において、学術におけるグローバルな課題のひとつ

として「将来の科学者育成」が取り上げられ、G7諸国の政治的指導者たちへ学术界からのメッセージが発信された。次世代の科学者育成に関しても、若手研究者をめぐる環境の整備が多くのアジア諸国において喫緊の課題となっている。

地域的な若手アカデミーの連携については欧州が先んじてきた面もあるが、アジアは近年急速に連携が進んでいる地域であり、今後の発展が見込まれる。日本の若手研究者たちにとっても、アジア各国の優秀な若手研究者たちと出会い、密接な協力関係や友人関係を構築していくことが、将来へ向けた日本の学術の発展にとって極めて重要になってくる。アジア若手科学者会議のような場が、そうした「出会いの場」となっていくことを願っている。(第3回の会議は、タイの若手アカデミーがホストする意思表示をしており、今後はアジア諸国が持ち回りで開催していくことも検討している。)

なお、アジアに限らず多くの国で若手アカデミーの会員資格が40歳以下となっている。そのため、45歳以下を要件としている日本の若手アカデミーは、国際的な若手研究者の会合へメンバーを派遣する際に年齢要件を満たす会員を探すことが難しいという問題に直面している。こうした年齢要件の相違は、若手アカデミーがシニア・アカデミーから独立した組織であったり、関連組織である場合もシニア・アカデミーのメンバーシップとは異なっている国が多いことに起因する。若い時期から国際的な研究者ネットワークに参加することは、これからの日本の若手研究者にとって重要な意味をもつため、日本学術会議でも連携会員ならびに特任連携会員の任命にあたってこうした視点も踏まえていくことが欠かせないことを指摘して、小論を結びたい。

●プロフィール

北村友人 (きたむら ゆうと)

日本学術会議連携会員、東京大学大学院教育学研究科准教授

専門：比較教育学、国際教育開発論